「幻に終わった大阪遷都論」

増山雄三

大阪市の中心部を南北に貫く御堂筋に面して、その名の由来となった、本願寺津村別院である「北御堂」が建っているが、そこは、明治新政府の中心人物の一人だった「大久保利通」が、大阪を都にしようと「幻に終わった大阪遷都論」で、その堂舎を天皇の仮皇居の「行在所」として使った所だ。

大久保は、慶応四年（一八六八年）一月十七日、新政府総裁の有栖川宮熾仁親王に対して、〈遷都ノ地ハ浪華ニ如クベカラズ。今日寸刻モ置クベカラザル急務ト奉存候〉という建白書を提出し、天皇が大阪に赴き、そのまま滞在すべきだと上申したのである。

大久保がこのような建白をした背景は、新政府が天皇を君主としていただき、欧米列強に対抗できる体制を整えるには、それまでの

しがらみが多く、内陸の「京都」から脱出する必要があり、また、貿易や交通と国防のため、港湾の重要性が増した事もあった。

当時、京都以外の大都市と言えば江戸か大阪だったが、徳川の勢力が残る中、幕府の本拠地だった江戸に、明治天皇の居所を移すことはできなかったので、もし遷都するとしたら、「大阪」しか選択肢がなかったのだ。

それで、明治天皇の大阪行幸は三月二十三日に実現し、江戸時代に朝鮮通信使の使節団が宿舎にした北御堂に近接した、格式があり眺望も素晴らしい、三階建ての「襲明閣」で天皇は起居し、随行者は本堂を宿舎とし、その滞在期間は四十日に及んだという。

現在、御堂筋沿いに聳えるのは、大阪大空襲で焼失したものが再建されたもので、史料が消失して詳細はよく分らないが、当時の門徒らは、天保山沖で汲んだ海水を樽に入れて大八車で運び、それを庭の池に満たして、タイを泳がせたという。

いま、津村別院の広報企画室長を務める藤原慶人さんは、「当時の大阪商人の多くが本願寺の門徒で、新政府に多額の資金を拠出していたというが、それは、大阪遷都を期待していたからなのでしょう」という。

ところが、その年の四月十一日には江戸城が無血開城され、それに続く上野での彰義隊による戦いも終結し情勢が安定したので、遷都先として江戸が急浮上し、大久保は周囲の意見を受け江戸遷都に考えが傾いて、京都に対する東の京として、江戸を「東京」と名を改め遷都先とし、それ以降、大阪遷都論が再燃する事がなかった。

それでも、大阪歴史博物館々長の豆谷さんが言うには、「大久保利通は、本気で大阪への遷都を考えていたようだが、当時の情勢は非常に流動的で、もし、江戸城が開城ならずに上野での戦争が長引けば、大阪遷都が実現した可能性が高かったと思う。それでも、北御堂はあくまでも一時的な滞在地で、大阪遷

都が実行されれば、恐らく大坂城を整備して皇居にしたと思う。だが、仮に遷都したとしても、大阪は人口が三十数万で江戸が百万を超えていたので、大阪がずっと首都のままであったとは考え難い。、秀吉以降の歴史上、大阪は経済の中心地として栄え、政治の中心となった期間は短かったのです」と話す。

ところで、この大久保利通という人物の、髯を生やした肖像をみると、同じ薩摩出身ながら、茫洋としたイメージで恰幅のある西郷隆盛とは全く違い、長身痩躯で、いかにも能吏を思はせる、怜悧な表情をしている。

それに、寡黙で他を圧倒する威厳を持ち、かつ冷静な理論家でもあったため、一瞥されただけで、その気迫に飲まれてしまい、いさかとっつき難いところがあったのか、鹿児島の薩軍墓地には、西郷や桐野以下の大きな墓標はあるが、大久保のものはない。

これは、征韓論を巡る革命政権批判派の西郷と、擁護派の主軸だった大久保との一大衝

突によるのかも知れないが、西郷は革命期の「情義機関」であり、一方、大久保は冷厳極まりない「政治機関」と言うべきだろうが、でも、二人の間には「私怨」はなかった。

西郷と大久保は、共に鹿児島城下の下級藩士の家に生まれたが、大久保の父は、藩政改革に与し弾圧をうけ、二十才をすぎた彼の家は悲惨を極め、食わぬ日には西郷家にでかけて、無言で飯をよそって食っていた、というような交わりから成立していた。

さて、明治四年（一八七一年）、成り立ったばかりの日本が、どんな国家制度を採るべきかを探すため、大久保は岩倉具視と木戸孝允らと一緒に、大急ぎで欧米視察にいったその途中、ハノーブルから十三時間の汽車の旅をし、フランクフルトに着いた。

そして一行は、町の中央にある「普仏戦争平和条約」を調印した「白鳥館」というホテルに泊まったとき、大久保の泊った部屋は、フランスとプロシャ両国の全権が、大論争を

してプロシャが勝利した記念の部屋だった。

この時、大久保は戦争に負けたフランスの政体は日本にとっては論外とし、勝ったプロシャこそ参考にすべきだと、彼の建国思想はこのあたりで固まり始めたというが、この外遊中、彼はその端正な姿勢を一度も崩さなかったものの、外遊が終る頃、「**帰国すれば、自分は隠退したい**」といったのである。

それは、欧米の進化をじかに見て、自分のような旧式な者では、到底これらのような文明を興す能力はないと知ったためだが、岩倉の説得で思い留まったとはいえ、彼の権力執着心というのは、この程度に希薄だった。

それでも、このような弱気を起こした大久保は、帰国してすぐに伊藤博文を起草者として、プロシャ憲法を参考にすべきだという、「**天皇絶対制国家**」という意見書を書き、それはまさに、彼の器質と政治感覚が生み出した、力作だったといっていいのだろう。

世の中がまだ定まらない、維新後の明治十

一年（一八七八年）五月十四日、東京麹町の紀尾井坂で、ときの内務卿だった大久保利通に対し、権力を恣にするという五項目の斬奸状を持ち、征韓論の西郷を下野させた事に憤激した、石川県の不平士族「**島田一郎**」ら六名により暗殺事件が起こった。

それらは、小異を捨て大道につく維新の改革を進める彼にとっては、片腹痛かったに違いないが、四十七才の大久保にとって、道半ばでそれを投げ出さざるを得なかったというのは、誠に残念だったに違いない。

とはいえ、暗殺されるまでは、財政も危機に瀕し、空中楼閣になりそうな政権で、中心的存在であり続け、これほど重量感と安定感を与えた人間は、彼を除いて他になく、まさに、「**大久保利通一人の存在によるもの**」といっても、褒めすぎではないだろう。

それにしても、明治の日本は、惜しい人間を、余りにも早くなくしてしまったものだ。

令和二年六月